
そこは真剣な世界だった

貧弱戦士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そこは真剣な世界だった

【Nコード】

N9918Y

【作者名】

貧弱戦士

【あらすじ】

とりあえずお気楽ライフを送っていた主人公『神川 獣代』。いつもと同じ、悪友とツルんでいた毎日だった、ある日彼に人生の幕を閉じる出来事があった。彼は死に、彼のもう一つの物語は始まった

ブローグ

「ああ、暇だ」

開口一番はコレだが、俺は『神川 獣代』だ
まあよろしく？

今年で高校二年生だ。まだ学生だぞ？

「誰か俺に挑む、若人達はいねえーかなー」

学校の机でうつ伏せになり、現在の願いを言う
だって！ 勉強とかつまんないわ！！ もっとハードをしたいの
よ！！

「何言ってるんだい。『餓王』や『野生の原点』って言われている君が、
そんな無理な願いを言っちゃ駄目でしょ」

「うつせえ。そのあだ名はお前しか言ってるねえだろ？ だが、何故
か女子からは『猿人』と呼ばれるが……そうか！！ 嫌よ嫌よ好
きのうちか！！??？」

「たんに嫌われているだけ（笑）」

「ウッセエエエエエエ！！！！」

『ドガーーーーーーン！！！！』

目の前に机全体を引っ繰り返した
コノヤロー、昔からム力つく野郎だ……！！！！ 殺す！！

「僕は避けるのが専門だから、君の行動なんて昔から読めているしね」

「ア”ン!? 女川 悟ウーーーー!!! 咬むぞゴリアー!!」

「野獣……（ボソツ）」

「聞こえたぞ、サアアアトオオルウウウ!!!」

昔からの俺の幼馴染、女川 悟

眼鏡を掛けて、髪はショートだが列記とした女性だ。だが、何故か男装をしている

て、内心から説明しているんじゃないかなった!!!??

「食らえエエエ!!! 『ワイルド野生パンチ』!!!」

黒板の前で追いつき、そこで隙を突き右腕全体を放った
だが悟は彼に避け、舌を出してまたも逃走し始めた
糞!!!

「待てやゴリアアアアア!!!」おい、神川!!! また貴様か!!!
ぎべっ!?!」

追いかけてようとしたが、国語の担任が俺を怒声で止めた
毎回毎回怒っている、。。。。な野郎だ……めんどくせえ

「神川!!! これは何だ」

「何って、おいおいていーちゃー? そこは黒板のはず……あれ!

？ 何か隣の教室と開通しているんだけど！？ どういう事だ！！」

「お前のせいだ！！ また破壊しおって……！！！！」

さつき放った『ワイルド野生パンチ』が黒板と隣のクラスとの壁を破壊していた

まさか悟、こんな事に気づいて……！！！！ この悪魔がアアアア！！！！

「罰として、今日の放課後の教室掃除はお前一人だ！！！！ わかったな！！！！」

「そ、そんなアアアアアアア！！！！ お代官様、いや仏様！！！！ それだけは……それだけは！！！！」

「罰は罰！！！！」

この糞ていーちゃー？ が！！！！ 今度お前の頭の草原、雑草の如くムシってやる！！！！

「あははははは！！ 本当に君は面白いよ！！ ぷぷ」

「デメエ、咬むぞ！！ ボリツとゴリツとニヨロツとガブツとするぞ！！！！」

「君の事、色々漏らすよ」「すみません」「よろしい」

もう外は夕日が無くなり始め、月がどんどん上っていく時間
悟と一緒に下校し、今は横断歩道の信号が赤なので止まっている

「色々とか、お前セコイ……」

「はははははは！！！！ 誉め言葉さ。さあてと……！！！！？？ 獣代！！
アレ！！！！」

「あん……て、うおおおおおお！！！！」

悟は指を指し、それは乳母車が勝手に動き赤ちゃんが渡っている
お母さんらしき人物は他の人と話して気づかず
俺はすぐさま動いた

「あつ……ぶねエエエエエエエエ！！！！！！」

『キキーーーー！！！！』

ロケットの如く早く、すぐさま乳母車から赤ちゃんを取り出し車
から避けた

周りの人はホッとした

「!?!? 私の赤ちゃん!?!?!」

「ほら、お母ちゃんだぞ。見えるか?」

「あーうー」

お母さんも気づき、手を振っている
これで安全……

だと思った

この場の全員が

運命とはとても皮肉で、神様とはとても信用してはならないと……

『プープー！！！！』

「なっ！？ た、タンプカー！！！？ しかも四台だとオオオオオオオ！！！？」

さっきの車があなっただから、何故かタンプカーが……しかも四台ともパニックになり、走り続けている

これじゃあ、サンドイッチだ

これは頭をフル回転した。このままじゃ俺とこの赤ちゃんも死んじゃう

けど、赤ちゃんだけなら……

「悟ウウウウウ！！！！ 受け取れエエエエエエエ！！！！」

『ビュン！！！！』

「え……お、おっと！」

赤ちゃんを投げ、悟は慌てて受け取った

さあ、生きるよ？ 赤ちゃん

俺は四台のタンプカーを見つめた。運転手達はすでに降りている……けど、それでも動いている

いや、止まろうとしているが遅い

で、何で俺は冷静なんだよ……俺らいくねえな！！！！

「一台でも多く止めてやる！！！！ これ以上被害は出させないぜ！

「!! 食らえエエエエエ!!!!」

「獣代————!!??」

右腕を最大限まで引き、タンプカーが来るのを待った
けど……時間は何秒よりも早かった

「『ワイルド野生パンチ』!!!!!!」

『ド————ン————!!!!』

これで、俺の物語終わり!!

「ホンマ、すみません!!!!」

「はい？」

だが、それには外伝というのがあった

「01」 俺の本当の世界にゴ―！！

さてと、今さっき死んだ俺は何しているんだろ？

いや起き上がったら変な人が土下座しているし、俺は一体何やつ
たんだ

もしか、カツアゲ！？ いやいや、記憶はちゃんと存在してんだ。
ありえねえ

じゃあ……ん？

よく見れば、その人の頭には金色に光わっかがあつた
そうか……やっぱ俺は死んだんだな

「あゝ、何で謝っているんだ？ 俺は死んだからか？」

「いえ、違うんや！！ これは事故というか……ホンマ、すんませ
ん！！！」

「……はい？」

顔を上げれば、男性で俺よりもイケメンな人だった
関西弁か……ギャップはいいなって、違う違う！！ 何で謝って
んだ？

「話を話してくれ」

「は、はい……そう、アレはついさっき」

語り side

そう、あれはほんの一時間前のことなんや

おっと、まずは自己紹介やな。ワイはゼウス隊第二隊長の、まぶた瞼つ
つーもんや

一応ワイの上司、まあゼウスはんの部下なんやが……まあ、それはおいおい

ワイは現当……神川はんが居た世界の事や。そこでな、何時もと
同じように現当の警備しとったんよ？

んでな？ ワイ等はいわば死神なんやけど、警備と兼ねて死人の
魂もこの天界という所に連れていくんや？ ここまではわかるやろ？

「まあ、だいたいな」

そんでなあ、まあ何とまあうことかに、さっきお前さんが助け
た赤ん坊……実は今日が命日やったんや

そんで、ずーっと近くで待機してはったら何とお前さんが助けた

んや

「ふんふん」

……事の重大がわからんやろうが、ワイ等にとっては重大かつ一大事なんやさかい

今日が命日なはずなのに、何で一人の人間の力で生きているや！

？ と……お前さんのせいや

「待てよ。それは運命が……こう、変わったとでも！？」

そうや

赤ん坊は助かり、お前さんが死んだ。ワイ等の読みとは全然違うや。それでちよつとお前さん……神川はんの事について色々調べてもらうたさかい

「個人情報だぞー！！」

いや、今はそれ言うたらあかんで？

んでわかった事が一つあるんや……お前さん、自分の『力』が不思議と思つた事あるんやないか？

「たしかに……異常とは思つが」

そう、それやー！！

お前さん……『生きる世界』間違いたんや

「……はい！？ 俺はあそこで普通に生きてたんだぞー！？」

たしかに、けどお前さんは間違いたんや。それも……ゼウス

はんのせいだな

「そのゼウス殺す！！！！　ゼウスもどきがアアアアアアアアアア！！！！！！」

まあゼウスはんは本物や

いいから話聞きたい。ワイの上司はゼウスはんなんや！！　だから、この失敗は他に知らされては困るんや

だから……　本当は天界で住むはずなんやけど、お前さんは特別に『転生』をやらせてもらう

「うおおおおおお！！！！　何処だゼウスウウウウウウウウウウ！！！！」

話聞け！！！！

いいか！！！！　今からその儀式を無理やりにさせてもらうで！！

！　お前さんの『本当の世界』や！！！！

獣代 side

転生だが知らないが、んなのに構ってられるか！！！！

「出てこいやアアアアアア！！！！　ゼウス！！！！　ぶつ殺してやるウウウウウウ！！！！」

「……　ほんな野獣やな。　んじゃまあ、アッチでも頑張りや。　『神川

獣代。ゼウスの承諾により、転生を許可する！！！」

「おわっ！？ 何だ、足元が光ったぞ！？」

足元が光だし、何やら魔方阵ぽいのが浮き出た
魔方阵は回転だし、辺りは突風や竜巻が起こりだした。俺はそ
の中心なので、大丈夫だが……

「神川はん！！ 苗字や名前はそのままや！！ 最初はブローク
ンになるやろぅが、まあそこは耐えるんやな！！ んじゃま、また
死んだら会おうさかいに！！」

「うおオオオオオオオオ！！！！？？？？」

そして風に巻き込まれ、意識が無くなった
もう何が起きているんだよ……はっ！？ これも悟の策略か！！
???

「さあ、大暴れせえや」

「おぎやアアアアアアアアアア！！！！（マジげんなゴリアアアアアアアアア！！！！）」

目を開けば、また新たな物語が始まっていた

く02く 宿敵登場!?

さてお前ら、久しぶりだな読者

いや、こつちの世界だともう数年くらい経っているから、久しぶりなんですよ……

まあ、最初はブローケン以上だったが、もう慣れたな

……自分が悲しくなるな。慣れって、怖いな
んでだ、今は俺は幼稚園の年長組みだ。まあ、この世界の人とはとにかく凄いつつーのがわかった

この街の偉い人は、ビームを素手で撃てるつつーし、俺もワクワクだねエ

まあそんなために、一応俺の名を広げるために……

「あにき!! ぱんかってきまちた!!」

「あにき!! かたをもみましゅ!!」

「おうおう、よきにはからえだぜ!!」

絶賛年長組みを絞めて、こうなりました

もう世紀。覇者ですよ、俺は。周り舎弟だらけ、もう幼稚園ライフ遠のいたよチクシヨ

いや、入学直後の喧嘩売られたからさーちよつと、アレをしちやったわけですよ

それでそれ以来、俺は年々とこの幼稚園の番長となっていたんだぜ!

うん……俺が名乗ってじゃねえ、色んな奴がそう言っているだけ

だから、男友達はできても女友達は出来ねえんだよ

はあ、これから甘酸っぱいくない、まさに梅干だな。レモンじゃなくて……梅干の酸っぱいの如く人生送るんだろうな

「おいおまえ!!」

「はあ？ んだよって………」

超不機嫌で答え振り向いたら……そこには、可愛い女の子だ
仁王立ちしていた

まさか、これは運命……!!
なわけえなか……馬鹿らしい

「何だよ、急に呼び出すなんて」

「おまえ、。。えんのたしか……そう！ かみかわだな!!」

必死に思い出そうと頭を抱えて、人差し指で俺を指す
ひらがなのが、良い……ていかにいかに!! なんか変な方向に
進む所だった

「そうだが……お前の名は」

「わたしはかわかみ ももよ!! おまえにけつとうをいどむ!!」

「……馬とかで良く使う言葉」

「それは血統!!」

「やる事する事」

「それは実行！　って、いいからけつとっしるー！！！！」

漢字知ってたんだね。決闘って、幼稚園児がするもんじゃねーぞ
仕方ねえ、ここは力の差というのを思い知らしてやるか
右拳に息を吹きかけ、一気に引き……

「『^{ワイルド}野生パンチ』！！」

『ドン！！』

「！？！？」

地面に向けて放ち、まるで爆弾が起こった跡が残っていた
たく、早く強い奴に会いたいぜ……
女の子の顔は下に

「さあ、これが俺の力だ。これでわか「ふふ、ふははははははは
！！！！！」え」

急に高笑いをした

ど、どうした！？　ビビって壊れたのか！？　だが、それは違った
そう、完全に笑っていた。苦笑いじゃなく、何かに笑って

「おもしろいぞ！！　わたしもだんだんてんしょんがあがってきた
ぞ！！　さあ、けつとっだ！！」

さらに熱くさせちゃったー！！！！！！？？

女の子は構え、それを一切止めない。そしてまたもニヤリを笑うやるしかねえみたいだな……。俺も自分流で構えた

そしてまるで空白の世界のように、あたりは静かとなった
最初に動いたのは……

「やっぱやめた」

「へ!？」

「おまえはまだまだおたのしみだ!! ここではやりたくないし、いつかやろう!! じゃあ」

構えを解き、疾風の如く俺から去って行った

は、はははは……おいおいおい、そりゃあねえだろ? そりゃあねえだろ?

ここまで盛り上がったねエ

俺の所だけ木枯らしが吹いた

『ブッチン!!』

そして何かがキレた……人間の理性が

「ざけんなゴラアアアアア!! 此処は戦う所だろオオオオオオオオ!!」

よ
かわかみ ももよか……いつか出会ったとき、決着を着けてやる

く03く 風の子、努力の子、知の子

さてと、あれからもまた時が経ちました……

もちの如く、あのかわかみという少女とはあれから一切も会っていない

舎弟から聞いてみたら、川神 百代という川神院の孫らしい

『あ？ 川神院って何だ？』

と聞いたら、周りの人はたいそう驚いていた
周りが揃ってこう言った……

『『『『日本の兵器だよ！?!?』』』』

らしい……日本の兵器か、そりゃあ最強と言っても過言じゃなさ
そうだな

うゝん、早く戦いたいのが何故かあの少女と俺は似ているような…
…似てないような？ 自分を見ているみたいだったからな

「はあゝ」

「ん？ どうしたんですか兄貴？ 溜息なんて」

「いや……何でも」

屋上でくつろぎながらも似合わない溜息一つ

お気づきでしょうか？ そうです、もうほとんどの人が漢字を使
えるって事は、俺はもう小学生

卒園なんかあったという間で、もう小学生ライフですよ

だけどまだ二年生か、と思い込んだ俺だったが、入学時にほとんどの奴らを舎弟にしました

1〜6年生までな。そういう悪は俺の舎弟だ

まあ、強い奴も数人は居たが俺には勝てなかったがな！！弱い弱い！！

……俺ってマジで人間なのかな？

「兄貴、そろそろ授業も終わった所ですし、もう帰りましょう。放課後だし」

「あ？ そうだな、今日は俺一人で帰る。ランドセル持って来い」

「はい！！」

はは、もう小学校じゃねえよこんなの

精神年齢、すでに二十歳超えたよ。もう酒が飲めるわタバコ吸えるわだよ

「ああ、腰イタ」

もう歳だなって、まだ子供だぞ俺

帰り道の途中で呟いた言葉が結構恥ずかしい。家に向かって歩き、空は晴天。アスファルトからの熱を感じる

「暇だな」

と呟いたら、事件が起こるはずも無い……

『ドゴンー!!』

「おいお前ら!!　ここは俺達の秘密基地だぞ!!」

「うるせー!!　ここは俺達の縄張りだ!!　餓鬼はすっこんでいろ!!」

「うわーん!!　折角……ぐす……つぐったのに」

「くっ!　成すすべ無し」

起こったよ……

俺の右方向にあるのは、空き地。そこで少年少女3人と、完全に不良の3人組みが居た

たく、不良があんな事していいのかよ?　悪いことしているわけじゃねえしなあ

めんどくせえ……俺はどこぞの主人公じゃええから帰る帰る
見てみないフリをし、脚を進めた

「おい、謝れよ!! 俺達に!!」

「はん、こんなチンケなのを作ったのが悪い!! 正直ウゼエんだ
よ」

「何だとお!!?? 化石頭のくせに!!」

「なっ!?! こ、こんの餓鬼!! 言わせておけば……!!」

「ちょ!?! おい、これ以上言ったら何されるかわからねえぞ」

「うるさいぞ大和!! おい化石頭!!」

「ぶっ殺す!! 死ね!!」

3馬鹿の一人が、バンダナの少年に拳を振った
少年少女3人組みは、目を閉じて次の瞬間を待った……。って、
おいおい大人げねえな

『ガシッ』

「「「「「!?!?!?」」」」」

「おいおい、化石頭さん。何やっているんスか? 子供相手に大人
げねエーッスよ?」

見過ごすわけにはいかねエなア

化石頭の拳が当たる前に、手で腕を止めた。そして、一斉に俺を見始める

「て、テメエもこいつ等の仲間か!？」

「え、違う「そうです。神川 獣代ツス」

「くっ!! 餓鬼が俺の拳を止めるなんて、マグレだ!？ ヤツちまおうぜ!!!」

「「おおー!!」」

3馬鹿共は俺を四方八方囲み、完全にヤル気を見せている
他の3人はとりあえず近くで見ているが、女の子だけが目を瞑っている。俺が負けるとな

「おい少女!! 何目エ瞑ッてんだ!!」

「へ……」

恐怖があるからこそ、目を瞑り逃避する
俺はそれが嫌いだ。嫌い過ぎるんだよ

「黙ッて見ている!! 俺が勝つ瞬間をなア」

「餓鬼の分際でー!!!! オラア!!」

『ドゥ』

「キヤアアアアアア!!!!」

醜い音が響いた

化石頭は完全にヤツたと思ったのか？ 俺は聞いてねエゼ
顔面に当たったが、俺は再度前を向いた

「!? 化け物か……！ いや、ただ浅かったただけだ!!」

こいつの言う事はとりあえず無視
少女……目を瞑ッたな？

「いいか!! テメエ等!! 俺を見ている!! 秘密基地の仇を
取ッてやるからよ!!」『ドゴー!!』!!」

「「「!?!!?!!?」」」

言っている最中に、3馬鹿共は俺に攻撃してきた。腹、顔面、頭
……もう許さねエ……

だが、今度はちゃんと見てくれたな。餓鬼共

さア、一瞬で終わらせてやる

「うぜえ……うぜえー……うぜエー……うぜエエエエエエエエ
エエエエエー!!……!!」

「「「どわ!?!」」」

「『ワイルド野生パンチ』!!」

「がへっ!!」

[illegible]

「さあて、今日からテムエ等は俺のパシリ決定だ。ハハハハハハハハハ！……！」

「それだけは、ご勘弁を——!!???」

もう夕方

空き地にはいまだに俺達が居る。まあ、こんなゴロツキが居るから誰も来ていないからかな

「おい！！ お前ってたしか、俺達と同学年の神川 獣代だよな？」

「あ？ そうだが……そうか、お前らが風間ファミリーっつーのか」

「おうよ！！ 俺は風間 翔一！！」

「アタシは岡本 一子。さっきは目を瞑ったりしてごめんなさい」

「俺は……まあ、直江 大和という。さすがは学校の番長。中々やるな」

これが、俺と風間ファミリーとの出会いだった

く03く 風の子、努力の子、知の子（後書き）

技紹介

『ワイルド野生パンチ』

気等一切使わず、ただ腕の筋力を使う破壊的な技

『ワイルド野生ジャンプ』

これも気等を使わず、脚と手の筋力で一気に高く飛ぶ

『ワイルド野生パンチ・墜落ver』

名前の通り、『ワイルド野生パンチ』を高く飛びながら、隕石の如く放つ技。
辺りに被害があるため、全力でやった事が無い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9918y/>

そこは真剣な世界だった

2011年12月2日18時52分発行